

日本環境心理学会

第 16 回大会・総会 プログラム

2023 年 3 月 11 日（土）10:00～

オンラインカンファレンス

参加費無料（要事前申込）

タイムテーブル

10:00 ～ 10:10 オープニング

10:10 ～ 12:10 ワークショップ：

環境×犯罪再考：「場所と犯罪」リスク評価の可能性を探る

12:10～ 13:00 昼休み（運営委員会）

研究発表

13:00 ～ 14:00 セッション 1 A：景観、情動反応

セッション 1 B：環境配慮

14:20 ～ 15:40 セッション 2 A：犯罪、地理的行動

セッション 2 B：地域

15:40 ～ 16:10 小休止（若手優秀発表賞選考）

16:10 ～ 総会・表彰・クロージング

1 今大会の開催形式について

今大会は、ワークショップ、個別研究発表、総会のすべてをオンライン（リアルタイム）で実施いたします。参加には事前のお申し込みが必要です。大会参加用の URL および ID とパスワードは、参加申し込み後に電子メールにてお知らせいたします。

★参加申し込みフォーム（google form）

<https://forms.gle/TzFQsF9AWNZgQHEZ7>

参加申し込み期限：2023 年 3 月 11 日（土）13:00

2 大会参加に必要なソフトウェア環境について

今大会のワークショップ、個別研究発表には、いずれもオンラインミーティング・ツールの Zoom を使用します。Zoom のインストールや環境設定などは事前にお済ませください。また、個別研究発表はテーマごとに設定したブレイクアウトルームで実施いたします。古いバージョンのソフトウェアでは一部機能が正しく動作しない場合がありますので、Zoom の最新バージョンへの更新をお願いいたします。

Zoom のダウンロード：<https://zoom.us/download>

Zoom サポートページ：<https://support.zoom.us/hc/ja>

3 参加者の皆様へ

- Zoom ミーティングの表示名（ユーザー名）を「氏名_所属」の形式に設定してください。
- 会の円滑な進行のため、Zoom ミーティングへの参加時にはマイクはミュートに、ビデオは停止にしてください。
- 講演者への質問には、原則として「チャット」機能をご使用ください。
※チャットはフロア全体に対する発言のみ可能です。参加者間での個別チャットは使用できません。
- 一般参加者による Zoom ミーティングの録画・録音は禁止します。
※ミーティングの録画・録音は大会運営事務局の管理の下で行います

4 発表者の皆様へ

- 各ブレイクアウトルームには、セッション開始の5分前までに入室してください。
- Zoom ミーティングの表示名（ユーザー名）は、氏名の前に「*」をつけ、「*氏名_所属」としてください。
- 個別研究発表の時間は1件あたり20分（発表15分、質疑5分）です。（本大会では通例よりもやや長い持ち時間を設定しています）。

発表時には画面切り替えなどの操作時間も含めます。時間内に発表を終えられるよう、Zoom の操作方法を含め、事前に十分なご準備をお願いします。

- 発表時は、ミュート解除とビデオの開始の設定をお願いします。発表が終わりましたら、再びマイクをミュートし、ビデオを停止してください。また、画面を共有した場合は画面共有を停止してください。
- Zoom の接続テストを大会当日（3/11）の大会開始前（9:15～9:45）に実施予定です。確認を希望される方はご利用ください（接続 URL 等の情報は大会用のものと同一です）。
- Zoom ミーティングを個別に録画・録音しないでください。

※ミーティングの録画・録音は大会運営事務局の管理の下で行います。

5 若手優秀発表賞

日本環境心理学会大会では、若手研究者の優れた研究発表に対し「若手優秀発表賞」を設けています（副賞：奨励費 金壱万円）。選考対象者は、当大会の個別研究の主発表者で、次のいずれかの条件に該当する当学会会員の方です。

※非会員の場合は、発表申し込み時に当学会に入会を申請し承認された方とします。

- a) 大学院（修士・博士）在籍者（大学院進学予定の学部生を含む）
- b) 博士課程修了後3年以内で、かつ常任のポジションに就いていない者（学振 PD 特別研究員、および任期付き特任職に就いている者を除く）

ワークショップ【10:10～12:10】

会場：zoom メインルーム

環境×犯罪再考：「場所と犯罪」リスク評価の可能性を探る

企 画：大山 智也（東北大学）
話題提供：芝田 征司（相模女子大学）
 足立 浩基（東北大学）
 大山 智也（東北大学）
指定討論：羽生 和紀（日本大学）

要 旨

近年の地理情報データの整備，景観画像の蓄積と解析手法の発達，系統的社會観察や（オンラインを含む）社會調査手法の洗練化などにより，都市における諸スケールでの「場所」と，個人・コミュニティの犯罪被害や犯罪不安との関連をみる研究は，犯罪学・都市社会学・心理学分野外の領域からも注目を集め，かつてない盛り上がりを見せている．一方で，長年にわたりコミュニティと犯罪をめぐって研究を重ねてきた Ralph Taylor は，最近の著書において，街路や施設といったミクロスケールの場所と犯罪の関係を追究する際の限界や，こうした研究を公衆衛生的発想で犯罪を予防する（特に一次予防，二次予防と呼ばれる）試みに適用する難しさを強調している．Taylor の問題提起は，多様なデータが入手・分析可能になった今だからこそのものであり，環境一人一行動のダイナミズムを探求する我々に重くのしかかる課題である．

本ワークショップでは，本学会で度々とりあげられてきた環境×犯罪をテーマにしつつ，ベテラン研究者と若手研究者のそれぞれから，先進的な研究事例を紹介する．さらに，上記 Taylor の著書の監訳者であり，日米の環境犯罪学研究に通じた指定討論者を交え，場所と犯罪の関連をめぐり研究を今後どうしてゆくべきか，上記の問題提起も踏まえつつ議論する．

研究発表 1 【13:00～14:00】**■ 1 A 景観，情動反応****会場：ブレイクアウトルーム A**

座長：白川真裕

- 1A-1 枯山水庭園の感性評価と脳波に基づく覚醒度の関係 (稲上 誠)
- 1A-2 複合利用商業空間の景観認知における傾向や特徴に関する日中比較研究－日本人学生と中国人留学生を対象として－ (平 暁為・羽生和紀)
- 1A-3 緑化オフィスの回復特性と快感情の関係について (芝田征司・村松正善・徳弘健郎・池内暁紀)

■ 1 B 環境配慮**会場：ブレイクアウトルーム B**

座長：武田美亜

- 1B-1 容器包装プラスチック分別の社会的受容性：住民の納得感に着目して (川又豪士・長谷川美紅・甲斐田直子)
- 1B-2 福島県庁におけるナッジラベルを活用したごみ分別行動促進 (植竹香織)
- 1B-3 自己や他者の関心の認知が環境問題についての会話行動に及ぼす影響 (神原 歩・安藤香織・杉浦淳吉・張 芸誼・大沼 進)

研究発表2【14:20～15:40】

■ 2A 犯罪，地理的行動

会場：ブレイクアウトルーム A

座長：萩野谷俊平

- 2A-1 犯罪危害と居住地選好：オンライン地図調査を用いた検討
(大山智也・羽生和紀・谷 真如・中江百花)
- 2A-2 子供の前兆事案被害における保護者の警察・学校への連絡意図の形成要因
(今井 巧・雨宮 護・島田貴仁)
- 2A-3 女性専用車両が被害者非難に与える影響：被害の回避可能性認知に着目して
(水上瑛璃佳・雨宮 護・島田貴仁)
- 2A-4 GPS ログデータから見たアクティビティスペースの地理的分布と COVID-19 流行前後の変化
(米田有希・雨宮 護)

■ 2B 地域

会場：ブレイクアウトルーム B

座長：大谷 華

- 2B-1 高齢者にとっての地域の居場所とその様相
(森 裕樹・藤田幸司・山城大地・相良友哉・倉岡正高・植田拓也・藤原佳典)
- 2B-2 「地元には何もない」という理由に関する研究 (谷口 渚・村上暁信)
- 2B-3 居住誘導施策が地価に与えた影響—北九州市における実証分析— (尾藤皓太郎)
- 2B-4 公共空間にて場づくりを行う実践者が抱く問題意識に関する調査
(大原真生・川野健治)

研究発表概要

研究発表 1【13:00～14:00】

■ 1A 景観、情動反応

1A-1 (13:00～13:20)

枯山水庭園の感性評価と脳波に基づく覚醒度の関係

稲上 誠（名古屋大学 未来社会創造機構）

Berlyne の理論によると、芸術作品に対して感じる魅力は、鑑賞時の覚醒度が中程度の時に最大となる。本研究では、枯山水庭園を対象として、その理論を検証する実験を行った。参加者は、簡易なバーチャルリアリティ技術により様々な庭園を鑑賞し、美しさや面白さなどを評価した。さらに鑑賞中の脳波を計測し、周波数帯域ごと（ α 波など）の強度に基づき、覚醒度の指標を算出した。今回の発表では、評価と覚醒度の関係の分析結果を報告し、理論の妥当性について検討する。

1A-2 (13:20～13:40)

複合利用商業空間の景観認知における傾向や特徴に関する日中比較研究－日本人学生と中国人留学生を対象として－

平 暁為（日本大学文理学部心理学科）

羽生和紀（日本大学文理学部心理学科）

本発表は、心理学的な視点で、統計的な分析方法を用い、調査地域の空間景観を有する雰囲気に対する日本人と中国人の評価から、日本人と中国人の環境認知における傾向や特徴を検討するものである。具体的には、調査参加者に日本東京六本木ヒルズの7個の景観と中国北京三里屯の7個の景観を、積田（2002）による15個の7段階の心理評定尺度で評価してもらった。そして、評価結果を基に t 検定と因子分析とクラスター分析を行い、日本人と中国人の景観認知・評価の共通点と相違点を明らかにし、その背後にある原因を考察した。本発表では、これらのことについて報告する。

1A-3 (13:40~14:00)

緑化オフィスの回復特性と快感情の関係について

芝田征司（相模女子大学）

村松正善（トヨタ自動車）

徳弘健郎（豊田中央研究所）

池内暁紀（トヨタ自動車）

注意回復理論では、ストレスや精神的疲労からの心理的回復を促進する要素として、逃避や魅了などの要素が重視されている。本研究では、緑化オフィス写真から知覚される逃避や魅了の程度と、それらのオフィスから受ける活動的快、非活動的快の程度との関係について検討した。緑量の異なる全 60 種類のオフィス写真を用いた Web 調査で得られたデータを分析した結果、逃避、魅了、活動的快、非活動的快の間には非常に強い正の相関関係が見られた。

■ 1B 環境配慮

1B-1 (13:00~13:20)

容器包装プラスチック分別の社会的受容性:住民の納得感に着目して

川又豪士（筑波大学理工情報生命学術院システム情報工学研究群社会工学学位プログラム）

長谷川美紅（筑波大学理工学群社会工学類）

甲斐田直子（筑波大学システム情報系社会工学域）

本研究は、家庭から排出される容器包装プラスチック廃棄物（プラごみ）の分別行動の規定因として納得感に着目し、継続的なプラごみ分別の促進要因を明らかにすることを目的とした。つくば市在住者を対象とした質問紙調査（ $n=391$ ）の結果、納得感とプラごみ分別の間には正の相関が認められること、納得感は命令的規範、経験による効果認識、分別習慣により向上し、分別に対する面倒さとステレオタイプにより阻害されることが示された。

1B-2 (13:20~13:40)

福島県庁におけるナッジラベルを活用したごみ分別行動促進

植竹香織（ポリシーナッジデザイン合同会社）

本実証では事業所の執務室内でのごみ分別行動の促進を目的としたナッジラベルを開発・検証した。福島県庁内の4部署を介入群と対照群に割り当て、介入群にはごみ箱付近にナッジラベルを掲示した。介入前・介入中・介入後に燃えるごみへのプラスチックごみの混入率と燃えるごみ排出量及びプラスチックごみ排出量を計測し、差の差分分析を行った。その結果、介入群のごみ混入率は6ポイント（約38%）低下し、効果は介入後も継続することがわかった。

1B-3 (13:40~14:00)

自己や他者の関心の認知が環境問題についての会話行動に及ぼす影響

神原 歩（京都先端科学大学）

安藤香織（奈良女子大学）

杉浦淳吉（慶應大学）

張 芸誼（奈良女子大学）

大沼 進（北海道大学）

他者は環境配慮に関心がないと思うがゆえに、人は環境配慮について会話をしない (Geiger and Swim, 2016)。そこで、環境配慮行動についての自己及び他者の関心の程度の認知が環境問題についての会話意図や会話行動に及ぼす影響過程を検討した。その結果、他者の関心の程度の認知は、他者が環境問題についての会話を行っている程度の認知を介して、自分自身が環境問題についての会話をする程度に影響を与えていた。そして、他者の関心や他者が会話をする程度の認知は自己の関心の程度よりも会話行動に与える影響より大きいことが示唆された。

研究発表2【14:20～15:40】

■ 2A 犯罪，地理的行動

2A-1 (14:20～14:40)

犯罪危害と居住地選好:オンライン地図調査を用いた検討

大山智也（東北大学）

羽生和紀（日本大学）

谷 真如（法務省）

中江百花（警察庁）

犯罪の種別ごとに，社会へもたらす「危害」の程度を測り，発生頻度を重みづけする犯罪危害指数により都市の治安を評価する試みが各国で行われている．本研究では，刑法で定まっている刑の重さ，ならびに社会調査を通じて得た市民による評価のそれぞれを基準にして危害指数を構成し，犯罪危害の程度を提示する前後で，都市の居住地選好が変化するかを調べた．調査は，東京 23 区の 77 警察署管轄地域を単位として，オンライン調査で行われた．

2A-2 (14:40～15:00)

子供の前兆事案被害における保護者の警察・学校への連絡意図の形成要因

今井 巧（筑波大学大学院）

雨宮 護（筑波大学システム情報系）

島田貴仁（科学警察研究所）

子供が被害者となる，声かけやつきまといなどの前兆事案は，子供から保護者に被害が伝わったとしても，保護者が警察や学校に通報・連絡しないことによって被害が暗数化し，事案対応が遅れることが懸念される．本研究では，ある政令指定都市の小中学生を第一子に持つ保護者 518 名を対象にウェブアンケート調査を実施した．その結果，事案の深刻さや連絡の効果性認知が，保護者の警察・学校への連絡意図に正の関連を持つことを示した．

2A-3 (15:00～15:20)

女性専用車両が被害者非難に与える影響:被害の回避可能性認知に着目して

水上瑛璃佳 (ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン)

雨宮 護 (筑波大学)

島田貴仁 (科学警察研究所)

女性専用車両 (WOC) は広く普及しているが、WOC を女性が選択せずに被害に遭遇した場合に被害者非難にさらされることが懸念される。大学生を対象とするビニエットを用いた実験の結果、防犯カメラや SOS ボタンと比較し、WOC が導入された状況では、被害に遭った女性への回答者の非難傾向がより高いこと、その理由が回答者に認知された女性の被害回避可能性の強さにあることが明らかとなった。WOC のような個人の選択により容易に実行できる防犯対策を行うにあたっては、そのことが被害者非難につながらないような配慮の必要性が示唆された。

2A-4 (15:20～15:40)

GPS ログデータから見たアクティビティスペースの地理的分布と COVID-19 流行前後の変化

米田有希 (筑波大学)

雨宮 護 (筑波大学)

ポストコロナのまちづくりのため人々の行動の実態把握が必要とされている。本研究では、茨城県を対象に、2017-21 年の各 4 月にスマートフォンアプリにより取得された GPS ログデータ ($n=1,492,332$ 人日) について、アクティビティスペースとして、個人・日単位の測位点を包含する楕円を算出した。その面積・離心率・滞在時間のばらつき・滞在回数を指標として類型化したところ、2017-19 年に比べて 2020-21 年では外出の量や外出内容が大きく変化していた。

■ 2B 地域

2B-1 (14:20~14:40)

高齢者にとっての地域の居場所とその様相

森 裕樹（東京都健康長寿医療センター研究所）

藤田幸司（東京都健康長寿医療センター研究所）

山城大地（東京都健康長寿医療センター研究所）

相良友哉（東京都健康長寿医療センター研究所）

倉岡正高（東京都健康長寿医療センター研究所）

植田拓也（東京都健康長寿医療センター研究所）

藤原佳典（東京都健康長寿医療センター研究所）

高齢者の社会参加先の一つに地域の居場所がある。本研究では、その場にいることや属することにより、安らぎ・安心、やりがい、自己実現、楽しみを感じることができる活動・場所を居場所と定義し、地域と高齢者をつなぐ専門職を対象に web 調査を行い、その実態や特徴を明らかにしようと試みた。97 事例の内容を分析した結果、74%の事例が公共施設を活用した交流会や文化活動を、その他では公園や空き店舗を活用した体操等を行っていた。また、活動内容や場所を問わず、多くの事例ではチラシや口コミで広く参加者を募り、参加者同士には互いに声を掛け合う様子が見てとれた。

2B-2 (14:40~15:00)

「地元には何もない」と思う理由に関する研究

谷口 渚（筑波大学理工学群社会工学類都市計画専攻）

村上暁信（筑波大学システム情報系）

本研究では、「地元には何もない」というネガティブな感情を引き起こす要因を明らかにし、その理由のモデル化を行った。大学生を対象に調査分析を行ったところ、予備調査にて有名なものと生活利便性の二つの要因があり、さらに6つの理由に分類できるといふ仮説モデルを得た。その後、本調査にてその妥当性の検証し、得られたモデルと地元の差、Uターン意向との関連性を踏まえ、今後の地方の在り方について考察した。

2B-3 (15:00~15:20)**居住誘導施策が地価に与えた影響—北九州市における実証分析—**

尾藤皓太朗（立教大学）

地方都市の過疎化を背景に、都市機能を集約化することで住民生活の質を維持するコンパクトシティ政策が注目されているが、住民と自治体の合意形成は容易ではなく、政策が住民生活にもたらす影響を定量的に評価する必要がある。そこで本研究は、同政策の実施が居住環境の質等を媒介して地価に影響すると考え、福岡県北九州市の居住誘導施策が地価に与えた影響を、統計的因果推論の手法である傾向スコアマッチング-差の差分分析によって分析した。

2B-4 (15:20~15:40)**公共空間にて場づくりを行う実践者が抱く問題意識に関する調査**

大原真生（早稲田大学人間科学研究科）

川野健治（立命館大学人間科学研究科）

本研究は街路空間で場づくりを行う実践者が抱えている問題意識について検討するものである。既往研究では利用者視点で行われる研究に比べて、実践側が抱く問題意識について十分な検討がなされていない。そこで、行政・企業・大学という3つの立場から場づくりを実践した3名の専門家に対し半構造化面接を行った。内容分析の結果、a) 近隣住民との関係構築における苦悩、b) 利用者の体験を描き出す参考データの不足という2点の課題が浮かび上がり、実践者の所属や立場に関わらず彼らが抱えている問題意識についての示唆が得られた。

開始時刻	プログラム	
9:15	zoomミーティング 使用の確認（発表者）	
	zoomメインルーム	
9:45	zoomミーティングルーム開場	
10:00	オープニング	
10:10	■ワークショップ 環境×犯罪再考：「場所と犯罪」リスク評価の可能性を探る	
12:10	昼休み（運営委員会）	
	ブレイクアウトルームA	ブレイクアウトルームB

研究発表 1

	■ 1A 景観、情動反応	■ 1B 環境配慮
13:00	1A-1 枯山水庭園の感性評価と脳波に基づく覚醒度の関係（稲上）	1B-1 容器包装プラスチック分別の社会的受容性：住民の納得感に着目して（川又・他）
13:20	1A-2 複合利用商業空間の景観認知における傾向や特徴に関する日中比較研究－日本人学生と中国人留学生を対象として－（平・羽生）	1B-2 福島県庁におけるナッジラベルを活用したごみ分別行動促進（植竹）
13:40	1A-3 緑化オフィスの回復特性と快感情の関係について（芝田・他）	1B-3 自己や他者の関心の認知が環境問題についての会話行動に及ぼす影響（神原・他）
14:00	小休止	

研究発表 2

	■ 2A 犯罪、地理的行動	■ 2B 地域
14:20	2A-1 犯罪危害と居住地選好：オンライン地図調査を用いた検討（大山・他）	2B-1 高齢者にとっての地域の居場所とその様相（森・他）
14:40	2A-2 子供の前兆事案被害における保護者の警察・学校への連絡意図の形成要因（今井・他）	2B-2 「地元には何もない」と思う理由に関する研究（谷口・村上）
15:00	2A-3 女性専用車両が被害者非難に与える影響：被害の回避可能性認知に着目して（水上・他）	2B-3 居住誘導施策が地価に与えた影響－北九州市における実証分析－（尾藤）
15:20	2A-4 GPSログデータから見たアクティビティスペースの地理的分布とCOVID-19流行前後の変化（米田・雨宮）	2B-4 公共空間にて場づくりを行う実践者が抱く問題意識に関する調査（大原・川野）
15:40	小休止（若手優秀発表賞選考）	
	zoomメインルーム	
16:10	総会・表彰・クロージング	